

## 聖地に主イエスをたずねて

シスター植木 脛子



「イスラエルに行く」と言えばどの人も「え！今？」危険なのに。特に姉妹たちはこの世の別れのように電話で心配してくる日々でした。

しかし、行ってびっくり、以前想像した暗い感じのテルアビブ空港ではなく明るい大きな空港でした。13時間の旅で少々疲れてしまいましたが、迎いのバスに乗り換えるときはワクワクしながら、暗くなってゆく車窓を眺めていました。暗がりの中から主がおいでになるのではないかしら？と子供のように期待して、見ていました。ガイドさんが説明を始め、「この道は、旧市街地の道で2千年前の道です。」イエスさまが歩いた道なのだと、本当はバスを降りて歩いてみたかったのです。このときから帰りの空港までこのガイドさんは私たちと同伴してくださいました。30年間ガイドをされて本当に知識が豊富でいたるところで親切に対応してくださいました。

わたしたちは主のエルサレム入場からご受難の道、公生活、私生活、マリアさまへのお告げ、マリアさまのエリザベト訪問、・・・と尋ねていきました。本当は怖くてわたしは行きたくないと思っていたのですがあることから行く決心をしました。主の歩かれた道、弟子たちを諭された丘やガリラヤの風を受けたい「主に会いに行こう！」と思いはじめました。

海拔800メートルのエルサレムからスタート。坂道を歩くのは足、腰に力を入れて転ばないように頑張って歩きました。第一日目の最初は「主の祈り」の教会でした。ここの教会の祭壇の横には日本語の主の祈りが掲げてありました。一畳ほどの大きさです。オリーブ山、ゲッセマネの教会、主の嘆かれた教会（涙の教会とも言われます）シオンの丘、最後の晩餐の部屋、鶏鳴教会でした。この日深くこころに残ったのは、鶏鳴教会でした。主が捕らえられた牢獄は元、井戸で上に丸い穴がありそこからイエスは両肩をひもで釣り降ろされて牢に入れられました。今、穴の中にはいれます。壁が一部黒くなっていました。そこは丁度イエスの頭が当たっていたと、説明され、手を伸ばして触れてみました。教会の外に石の階段があり、5、6段まで歩きました。それは、2000年前の石段でイエスも2回は歩いておられたところです。すぐにイエスの足跡を歩きました。



主の歩かれた道

どこも感動でしたが特に私にとってここは忘れがたい所です。

次の日ベテスダの池からスタートしました。主が長患いの人を癒されたのを思い出しました。すぐ横の聖アンア教会に行きましたが前のグループの黒人の方々が凄いの歌声を響かせておられ、圧倒されました。そのあと歌うのは気が引けましたが日本語のサルベレジーナを歌いました。「上手だったよ！」と添乗員の小池さんに励まされました。マリア様の誕生の小聖堂ではアベマリアの祈りを捧げました。それからピア・ドロローザ心待ちにしていた主の道行をしのびながら十字架を担いで歩きました。各留でシスターたちが2人一組交代で担ぎました。主の十字架はもっと重いものだったのですが少しだけ主のお苦しみが体験できてうれしいことでしたがとても緊張して歩きました。11留から十字架なしでゴルゴタの丘、カルバリオで祈りをささげ聖墳墓教会の中では主のお墓に入り岩の台（主のご遺体を置かれた）に触れながら祈りました。この石の



台は当時のものではありませんでしたが、主のお体を置かれたことを観想するのに十分でした。ここはカトリックだけではありませんのできらきらと飾り立てた祭壇で、その中に十字架が立ててあり何とも不思議な感じでした。そのあと、嘆きの壁まで降りて行き私たちが祈りを短く捧げて迎えるバスが来るところに行きま

した。ポツポツと降り出した雨は雷とともに土砂降りになり雷の怖いシスターは大変な思いで待ちました。濡れた冷たい体をシャワーで温め一日が終わりました。興奮した一日で夢の中までエルサレムは続きました。

3日目は洗礼者ヨハネの教会から、そこでは日本からおいでの方のフランシスコ修道会の神父さまに会いました。「今、日本語がうまく話せない」と仰ってました。幼いヨハネがヘロデの手から守られたと言われる岩がありました。何でも、岩が二つに割れて、ヨハネを隠したとか？・・・初めて聞きました。この教会の庭に日本語のザカリヤの賛歌が各国のものと一緒に掲げてありましたのでみなでザカリヤの賛歌を歌いました。

そこから坂道をゆっくり歩いて聖母訪問教会に行き、そこで美しい絵画と出会い眺めて祈りました。ここにも日本語のマリアの賛歌があり、世界のどこでも日本を思い出せます。時々日本語で話しかける外国人もいてびっくりすることがたびたびありました。

イスラエル博物館ではエルサレムの模型が庭いっぱい作られていて、今日

までのわたしたちの巡礼を改めて確認できました。博物館の中では初めに目立つところに死海文書のイザヤ書の写本が展示されていた。その他にユダヤ人の生活を中世から今日まで模型で辿ったコーナーや紀元前 1500 年頃の優れたガラスの製品などを見ました。

バスで 15 キロほど移動して生誕教会へここも楽しみにしていた教会でした。修道服の私たちはどこでも歓迎され、ホテルではいつもカメラをこちらに向けているのに出会い、「一緒に入ってください」といろいろな国の方から頼まれました。珍しいのでしょうか？でも、良いこともありました。その一つ、生誕教会では、もうすでに 50 人ほどの列ができて、主の降誕の場所を見る人たちでいっぱいでした。私たちは祭壇の近くで降誕の場所の出口の方に椅子に座って待つように言われて待っていましたが出口の方から 2 人ずつ入るように警備のひとに指示されて 50 人ほどの人より早く主の降誕の場所に行くことができました。イエス様が生まれておかれた岩と飼い葉桶の置かれたところを触れてきました。すぐ近くの羊飼いの野の教会へ可愛い教会でした。すぐ隣に岩屋の教会、羊飼いたちが羊を入れて外敵から守っていた岩屋が今は小聖堂になっていたのです。

わたしたちは聖堂の中で「聖夜」を歌ってからホテルへ向かいました。

エルサレムにさようならをして、翌朝はクムランへと巡礼の旅を続けました。朝の美しい緑の木々のなかを専用バスで下っていきますと木々のない丘、丘がなだらかに曲線を描いている間に時々ベドウインが山羊を飼っているのが見えました。そのうちに聖書に出てくる「善きサマリア人のたとえ」でイエスが話された、モデルの宿が発掘されたところに案内してもらいました。周りは赤っぽい土で何もなく、盗賊が出たら、助けられないようなところでした。今、聖書を手にする時、荒野又は砂漠がどんどころか分かります。



次に死海写本の洞窟、エッセネ派集落と主イエスの誘惑を受けられた荒野、イエスが祈られた洞窟、発掘の後などを見ました。その後ロープウェイでのぼりました。エリコの町が一望できるところです。ギリシャ正教の修道院まで元気のある人だけが少し登り道を歩いて行きました。岩屋に張り付いたような修道院でした。エリコの町で

「ザアカイの木はこんな木だった。」と言われる、樹齢 150 年ほどの桑葉イチジクの木をバスの中から見ました。

地雷を埋めている印の黄色の板に赤い三角の描かれた立札を横目で見ながらヨルダン川に行きました。土色の水です。でも、そこで水に浸かって洗礼を受

けて喜んでいる団体もいました。水から上がる時みんなの手を叩いて祝福をしていましたが、わたしたちは信仰薄き者でしょうかその泥水を触ることはできませんでした。

死海の水辺に到着しました。ここはとても暑く夏日のようでしたから早速、靴下を脱いで水に浸かりました。泳いでいる他の団体もいました。「金槌のわたしでもここなら、浮くかしら」と口にする時みんなしてワイワイガヤガヤと言いたいことを言いましたが泳ぎませんでした。ちょっと、みんなを楽しくさせたみたいでした。

明日はいよいよナザレです。

先にタボール山、主の変容の教会で主日のミサに与りました。アメリカからのグループと一緒にミサを捧げることを引き受けてくださったから、ミサの中でわたしはお恵みをいっぱいいただきました。ご聖体を拝領して席に着いたとき不意に涙がこみ上げてきて自分でも驚きながら主の愛をしっかりと感じました。しかし、ミサの後ここでもスコールに会いました。昼食の後、お告げの教会へこの教会は大変美しい教会でした。聖ヨゼフの教会、初めて奇跡のあったカナの教会に行きましたがここでは、結婚の更新があっていました。みんな幸せそうでした。長い一日が終わり修道院経営の山上の説教の教会の宿泊施設につきました

出発前にお隣の主の山上の説教の教会へこの聖堂は八角形の天井でした。「幸いなるかな」が8回だからとの事でした。ガイドさんはヘブライ語で幸いなるかなの聖書のことばを読んでもらいました。聞きながら、主がなだらかな丘にお座りになり話しておられる情景が目には浮かびました。

イスラエルはどこに行ってもブーゲンビリアの花が一杯、赤、ピンク、白、黄、赤紫などがありました。

残り少なくなった巡礼の旅、主の公生活の足跡をたどります。はじめにペトロが「あなたは生ける神の子です」と信仰告白をしたバニヤット（カイザリア）へそれから、イスラエルとシリアの国境を見にゴラン高原の展望台にいきました。上から見る限り平和なシリアに見えましたが・・・そこでシリア人に会いました。帰りたくても帰れないとのことでした。

昼食はガリラヤ湖を見ながらペトロの魚のから揚げをおいしくいただきました。ペトロの家、イエスの宣教した会堂、パンと魚の奇跡の教会、パンを載せたと言われる岩が教会の真ん中にありました。ペトロの首位権教会へご聖体のイエス様を訪問して後、美しい虹に祝福されながら最後にガリラヤ湖の船にハワイからの一組のご夫婦と一緒に乗り30分ほど遠くにガリラヤの村を見ながら

主イエスが共にいてくださるような感じで聖歌を何曲も歌いました。

最終日はカルメル山、ステラマリスの教会へ、今回の巡礼ではどこでも、はじめての聖堂にご聖体が安置されていれば3つの願いをしてみました。夕暮れが迫り夕日がとても綺麗でした。まるで「さようなら」と言うように、パウロが船出した港町が最終でテルアビブ空港へと向かいました。

帰国後、イスラエルでお会いした主はすべての事の中に生きておられると感じるこの頃です。

主の祈りの教会にて



聖母被昇天教会のマリア像



ガリラヤの町



御受難のイエス

